

## コロナ禍で…

彼は椎葉生まれ、西都と清武で育った24歳の青年。父親の仕事の関係で1歳半の時に椎葉を離れ、愛育幼稚園に2年通園したあと、高校卒業まで宮崎市内で暮らしました。関西の大学に進学してからは、自分は何をしたいのかを探すために時折海外に出かけては見聞を広めてきました。まだ足りないと考えたのでしょう。就活の始まる大学三年の頃、卒業を1年引き延ばし、世界一周旅行に挑むことを決意しました。しかし、ご存じのとおり、コロナのために、海外旅行の計画はいっぺんに吹き飛び、就活もままならなくなりました。人生で初めての挫折を味わい、途方に暮れる日々を送ることになったのです。

## 人生は、偶然の積み重ね

そもそも、彼がなぜ海外に視野を広げようとしているのかについては理由(きっかけ)があります。

彼は、5歳の頃から姉にくっついてラボ・パーティという、物語劇などを通して英語を学ぶ教室に通っていました。その活動の中で、外国人のホームステイを受け入れたり、自分も海外ホームステイを体験したりしました。

中学3年の秋のことです。部活を引退し、何か物足りなさを感じていた彼は、「高円宮杯中学生英語弁論大会出場者校内選考会」のチラシを目にします。そこで、一人では心細いので、「一緒に出てくれるなら応募する」という約束を友人に取り付けました。その友人は自分よりはるかに英語スピーチ力が上だったので当然乗ってくるだろうと目論んでいたのです。ところが、その友人は「やっぱり無理、人前に出るのはイヤ!」と言って応募用紙を提出しませんでした。

そんな適当な応募動機ですが、校内、市内、県内の選考会をあれよあれよと突破して、東京で行われる全国大会の切符(宮崎県2位)を手に入れます。そして、流暢になんか話せないのに、予選を通過し、20名程度に絞られた決勝大会で何と全国3位の称号を与えられました。おそらく、田舎の素朴な中学生がユニークなスピーチをしたことが認められたのでしょう。1位、2位はもちろん、周囲の出場者はほとんどが英語を生活語としていたり、帰国子女やハーブだったりする生徒ばかりでした。

## 環境は人を創る

決勝大会に出場した生徒、指導者及び家族は、帝国ホテル鳳凰の間で開かれる晩餐会に招待されます。高円宮妃ほか各国の大使が集い、総勢2,000人を越える大パーティーです。本選3位までに選ばれた生徒3名はその場で改めてスピーチを行うことになっています。そう、偶然の積み重ねでここまで来た彼は、こんなところでスピーチをすることになったのです。この大会で、彼は計り知れない可能性の存在を認識します。そして、副賞で得たイギリス留学や奨励金で、さらに可能性が広がることを体感します。全国3位という称号を傘にすることなどは、もはや彼にとって小さい人間のすることという考え



【充実している小5のお米学習】

があり、知らない人には一切話したことはありません。大学受験の願書、就活のエントリーシートでも全く持ち出すことはありませんでした。過去の栄光なんかどうでもよい、むしろ持ち出すことが恥ずかしいようです。

自分で選んだ大学に進学してからは、自分のやりたいことを徹底的に追究し、その中で関わる人・ものから多くの事を学びました。彼曰く「意識高い系」の人・ものと触れることで自分をどこまでも成長させることができる、視野を広げることができる、そうです。あの弁論大会に出るまでは、ふつうの中学生一野球部では万年補欠、親に特別反抗をしたことがない、将来何をしたいのかまだ漠然としている一だったのですが。

## 宮崎から世界に

子ども達をどのように育てて行くか。学校経営の責任者として考えさせられます。「第五次西都市総合計画」や「西都市教育基本方針並びに教育施策」などに参考となる理念を求め、目を通します。人口減少を踏まえて西都市が取り組むべき地方創生は何か、長期的に人づくりを担う学校・社会教育で取り組むべきことは何か、模索の日々が続きます。

挫折を味わった彼の話に戻ります。

「単純に金儲けがしたい。」一昨年、彼はそう言いました。おそらく、(頭の固い親にあれこれ話したって、どうせ理解はできないだろう)と踏んでの発言だと思います。金儲けが目的ではなく、過程の諸々(可能性)にやりがいを見出したいのでしょうか、早い話の方が面倒臭くないといった心境でしょうか。

コロナ禍の中、親には全く理解の及ばない勉強や努力をして、彼は商社マンの道を選び、第1希望の企業

から見事内定をもらいました。そういえば、漠然と進路を描いていた時代、彼は「日本と諸外国の橋渡しとなる仕事をしたい」と言っていました。当時は本当に漠然としていただろうと思うのですが、秘めたもの、長年温め続けるものをもつ性格は親に似ているか…とも思います。

彼の商社は鉄鋼・木材関連です。宮崎出身が影響したのか、彼は木材部に配属されました。木材の一番の取引先はロシア。ウクライナ戦争で入社早々、取引の大転換を迫られます。「自●するぐらいなら辞めて!」と心配する母親に「当たり前やん。でも、やりたいこと(金儲け)のためならきつと思わん。」と言っているそうです。

彼の父親は、遊びすぎて大学を2年も留年しました。我が子から「教師にだけは絶対ならない」と言われました。彼…息子が現在の道を進んでいるのは、間違いなく親以外の人のおかげです。偶然が積み重なっただけです。ですから、希望の職が決まったからと言って、今の道がベストとは限らないし、これからどんな進展があるのか、本人はおろか誰も分かりません。隣家に住む私の高齢の父は「子が親のそばに戻ってきてくれたから、子育ては成功。」と自負していますが、私は失敗なのでしょうか。いいえ、成功とも失敗とも私は微塵も思いません。ただ心配と応援をするのみです。



【清々しさを発揮した中三生徒達】